



Indian Philosophy

インド哲学専修

インド哲学専修では、仏教を含めた古典インドのさまざまな思想や宗教の研究を行います。具体的には、主としてサンスクリット語（梵語）やそれから発展した言語（パーリ語など）で書かれた文献の解釈が研究の中心となります。サンスクリット語は初心者には難解に見えますが、内実はとても明晰な言語です。これを用いるインド哲学も実に「道理にかなった」世界で、批判的・論理的思考が研かれるとともに、現代社会が求める、課題を自ら見つけ解決する能力の訓練にも格好です。幅広い原典を読み解くことで、例えば業や輪廻^{ごうりんね}といった思想が既に仏教以前に展開していたことや、インドの仏教が現在の日本の仏教と如何に異なっていたかが理解できます。上記古典語以外にも、諸現代語（辞書や文法書、研究書を利用するのに、重要性の順から独・英・仏語）をはじめとする訓練を根気強く積むことが必要ですが、難問を解決することが好きなチャレンジ精神に富む人には飛躍の舞台となることでしょう。

教育目標としては、2年次で、サンスクリット語をはじめとした基礎的な知識や学力を充実させ、3年次からは、大学院生との学問的な相互交流の中で原典を用いた研究資料の読解を開始し、4年次において、原典資料の的確な把握と正しい論理展開に基づいた卒業論文を作成することを目指します。

教員

どうやま・えいじろう
堂山英次郎 教授
なわ・りゅうけん
名和隆乾 講師

<https://handai-indology.wixsite.com/home>

何を学んでいるの？

インド学の基礎

古いサンスクリット語で伝承されたヴェーダと呼ばれる祭式文献に基づき、仏教以前のインドの社会や世界観について講義します。文化的源流であるインド・ヨーロッパ語族にも触れます。

インド仏教史概説

「インド学の基礎」で学んだヴェーダ文献以後、仏教を中心としたインド思想がどのように展開していくかを時代順に講義します。現代語訳を通して原典資料に触れる機会も多く持ちます。

どんな授業があるの？

【講義題目】

インド学二次文献講読
インド仏教史概説

【演習題目】

ヴェーダ文献研究
パーリ語文献研究

演習科目は、言葉を厳密に分析しながら原典を精読する、本専修の中核をなす授業です。昨年度はバラモン教最古の聖典（韻文）『リグヴェーダ』（前1200年頃）、同じくバラモン教の散文聖典（前9-7世紀頃）、インド初期仏教聖典『ダンマパダ』（前4-3世紀頃）等を講読しました。

教員が選ぶ印象に残った卒業論文

Suttanipātaにおける māyā と māna の研究

『スッタニパータ』において、māyā-「まやかし」と māna-「慢心」という、一見、関係ないようにみえる両語がしばしば並列される点に着目し、並列される理由を具体的用例に基づき論じた研究です。インド初期仏教における煩惱同士の関係性については不明な点が多く、その一端の解明を試みたものとして評価されます。（選：名和隆乾 講師）

【卒業論文題目】

Suttanipātaにおける māyā と māna の研究
『シャタパタ・ブラーフマナ』におけるソーマ将来の神話について
ヴェーダ文献における mārman-
「弱点」の用法研究
『中論』第十五章の研究——『ブラサンナパダー』を手がかりとして

なぜインド哲学研究室を選んだのですか。

片山 全学共通教育科目「インド学の基礎」を受講して、特にことばの持つ実現力であるブラフマンの思想に興味を持ったからです。最後まで研究室をどこにするか迷っていましたが、研究室の雰囲気も決め手の一つでした。

東 もともとこの研究室で初期仏教を学びたいと思い、大阪大学を受けました。研究室訪問等で自分が学びたいものはこれだという思いが強まったため選びました。

廣澤 あまり他の大学にない専攻で、どんな学問なのかと興味が湧いたからです。せっかくならここでしか学べない、面白そうな学問に触れてみたいという思いがありました。

杵築 もともと大学でしか学べないような分野を勉強したいと思っていた中で、大学1年生の時に受講したインド哲学の授業が面白かったので選びました。

2年生では前期にサンスクリット語の文法の、後期には講読の授業を受けます。感想を教えてください。

片山 一語一語丁寧に地道に読み解いていく必要があり、なかなか手強いですが、だからこそ読めたときの達成感があると思います。後期は「ナラ王物語」の講読をしますが、自分の訳文を検討していく中で、学ぶことが多くあり、とても充実していると思います。

東 3年生になってからはほぼ全ての

授業を上回生、院生と一緒に受けています。レベルが高くていくのが大変ですが、その分学ぶことが多いです。

廣澤 前期はインプットが多く、独特の文法形態に慣れるのが大変でした。また後期では実践的な文章を読むため、初めは難解に感じる部分もありました。ただ、少人数体制で分からない部分はすぐに先生や先輩に尋ねることが出来るので、不安はあまりありませんでした。

杵築 古代の言語なので英語などの外国語学習とは要領が全く異なり、とにかく難しいです。まだまだ分からないことだらけですが、少しずつ理解できる部分が増えていくのは楽しいです。

3年生以降は大学院生にまぎっての専門的な授業になります。感想を教えてください。

東 何年も学んできた先生方や先輩達が、色々な視点から意見をくれることで自分の視野が広がる感覚が楽しいです。

廣澤 院生と混ざって、サンスクリット語とパーリ語の授業を受けています。いままで聞いたことない儀式について学ぶこともできます。また名前だけ聞いたことあるような神様（インドラなど）の性質を、文献の記述から読み取ることが出来る点も面白いです。

杵築 全員が同じ授業を受け、同じ勉強をするようになったからこそ、質問をしやすく疑問点の解決がしやすいです。

研究のテーマを教えてください。

都築 私は古代インドで「同盟」を司る神ミトラを中心に研究しています。例えばミトラが神話でどのような役割を担っているか、どのようなものを捧げられているのかからミトラの特徴を導いたり、そもそも古代インドで「同盟」がどんなものかと思われていたかを明らかにしたいと思っています。

授業外の研究室の雰囲気について教えてください。

片山 先輩方がみんな優しく、和気あいあいとしてとても居心地がいいです。少人数だからこその学生同士の距離感の近さも魅力だと思います。

東 アットホームな雰囲気があって、色んな質問がしやすいです。

杵築 個人的には図書館のような静かな空間より、学問に関する議論が飛び交っている点で、勉強もはかどります。

福島 勉強や研究をともに行うだけに留まらず、コーヒブレイクや節目での打ち上げの際は、先生方も交えて談笑できる素敵な環境です。

[インタビュー協力]

片山さん(2年)、東さん(3年)
廣澤さん(3年)、杵築さん(3年)
都築さん(博士後期3年)

[インタビュー編集]

福島さん(博士前期2年)

